

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

法政大学キャリアデザイン学部連続シンポジウム 第16回 ひとの人生や生活(ライフキャリア)をサポートするしごと

法政大学, キャリアデザイン学会

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

13

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

111

(終了ページ / End Page)

133

(発行年 / Year)

2016-03

法政大学キャリアデザイン学部
連続シンポジウム 第16回

ライフキャリア
ひとの人生や生活をサポートするしごと

【概要】

開催日：2015年10月23日（金）13：00～15：10

場 所：法政大学 市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 26階 スカイホール

【プログラム】

趣旨説明

講演：鈴木直道氏（北海道夕張市 市長）

講演：田中直子氏（NPO 法人 夢のデザイン塾 理事長）

ディスカッション：斉藤潤一氏（東海テレビ 報道部 部長）

田中夢実氏（東海テレビ 報道部 記者）

総括：金山喜昭（法政大学キャリアデザイン学部 学部長）

開会

佐藤（司会） 定刻になりました。キャリアデザイン学部シンポジウムを始めさせていただきますと思います。

本日は、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。私、司会を務めさせていただきます。キャリアデザイン学部の佐藤恵と申します。どうぞよろしく願いいたします。（拍手）

本日のシンポジウムは、「ひとの人生や生活（ライフキャリア）をサポートするしごと」ということでテーマを設定させていただきました。私どもキャリアデザイン学部では、自分自身のキャリアを主体的に自らデザインする力と同時に、他者のキャリア形成を支援する力を^{かんよう}涵養していくことを目標に掲げております。

そのような中で、人のキャリアはどういう場で築かれるのかということですが、キャリアという

言い方をしますと、どうしても職業上のキャリアですとか、あるいはそうした職業上のキャリアに至るまでの教育上のキャリアを指すことが多いと、一般には思われがちだと思います。

では本当にそうなのかとあらためて問い直しますと、やはりそうではないわけですね。確かに戦後の日本社会で、人間というのは生産者であり労働者であると。生産や労働という形で人間を把握する見方が主流だったわけですが、1970年代以降、生産や労働という活動だけではなく、消費や余暇を含めた生活全体を通して人を把握する見方が起こってきたわけであります。そうした生活への注目の流れの一環としまして、私どもキャリアデザイン学部では、人のキャリアが築かれる場として、働く場、学びの場以外に生活の場、ライフキャリアというような領域を考えています。

本日は、その生活の場、ライフキャリア領域に照準いたしまして、「ひとの人生や生活（ライフ

キャリア)をサポートするしごと」というテーマを設定させていただきました。本日もお招きいたしました皆さんは、自治体の方、NPOの方、そしてマスコミの方と、何らかの形でほかの人の人生や生活のライフキャリアをサポートする、支援するお仕事に携わっていらっしゃる皆さままでいらっしゃいます。

セクション1といたしまして、最初に北海道夕張市の市長でいらっしゃいます鈴木直道様からご講演を頂戴いたしたいと思っております。

鈴木様、どうぞよろしくお願ひいたします。(拍手)

講演

鈴木直道 (北海道夕張市 市長)

ただいまご紹介いただきました、北海道夕張市から参りました鈴木直道でございます。

私は法政大学の卒業生でございまして、このボアソナード・タワー竣工とともに入学しました。埼玉県三郷市の出身で、北海道には縁もゆかりもございませんでしたが、埼玉の高校を卒業したあと、18歳で東京都庁に入りました。もともと大学に行きたかったものですから、都庁に行きながら、翌年に法政大学の2部、夜学の法学部法律学科に通わせていただきまして、2004年、卒業させていただいております。

そんな私が北海道夕張市にご縁をいただきましたのは、夕張市が自主再建が難しいということで2007年3月6日に財政再建団体になった時です。わが国における財政再建団体、いまは財政再生団体というのですが、当時はものすごく話題になりました。標準財政規模の8倍にも及ぶ赤字額。財政再建団体移行時点では353億円。それを18年間で返すという、あまりにも前例のない額の大きさだったことから、非常に多く注目を集めた事例でありました。

そのとき行われたのが徹底的な行財政改革で、職員が260人いたのですが、いま現在は100名と、半分以下に圧縮。その当時、特別職を除くと

最高ポストは部長で、部長や課長が50名以上いたのですが、3人以外は全員辞めてしまった。何で辞めたかという、退職金を減らすので早く辞めたほうが生涯賃金としてはいいですよということで、いまでは民間企業で当たり前に行っていますが、公務員としてそこまで大胆にやったのはなかなかなかった。

管理職が50名以上いたのが3人だけになったということと、若い職員も辞めた。何で辞めたかという、「年取ベース40%カットを18年間やります」とした。40%カットを18年間という、平均で3,000万くらい生涯賃金が減る。しかも260人から100人に減っていますから、仕事は倍以上やってくださいと。

会社にお勤めの方もこの場にいらっしゃるかもしれませんが、金曜日の夕方に、「じゃあ、また来週も頑張ろう」と言って帰って、翌週の月曜日に仕事に行ったら、自分の上司だった部長や課長は誰もいない。若くてバリバリ働いていた30代の職員がみんな辞めてしまって、管理職がいない中、残った人たちで2倍、3倍の仕事をやりながら、給与は40%カットを18年間やりますと言われる。会社への愛にあふれ、私は1円ももらわなくても会社のために命をかけて頑張るといふ人もいるかもしれませんが、ご飯を食べなければいけないというのもあって、辞める人が相次ぎました。

そんな状況のとき、東京都は、当時は石原慎太郎知事、猪瀬直樹副知事の体制でやっていたのですが、猪瀬直樹副知事が、夕張がそんな状況だったら東京都から職員を派遣すればいいじゃないかと発表した。私もそれをテレビで見ている、いったい誰が行くのだろうかと。東京都の職員は、東京で働くのが当たり前。東京都の職員なのに北海道で働くとはどういうことなのかと思って見ていた。それからしばらくして人事に呼ばれ、「夕張に行かないか」という話でご縁をいただきました。そもそも私は、市長になる前に、東京都民の皆さんの税金でもって夕張市の応援をしていたわけです。2年2カ月間ですが、やっていました。そのあとに東京都を退職して、市長になっていまは2

期日、5年目です。

市長にしては、ずいぶん若そうだと思った方もいるかもしれませんが、当選当時30歳1カ月で市長に就任しました。いま34歳ですが、当時は全国最年少市長ということで就任しています。いまは岐阜県美濃加茂市の市長さんが、たしか31で一番若いと思います。

市長就任までの話をするだけで1時間くらいかかるのでやめます。さて、今日はキャリアデザインといったことで、人生や生活をサポートする。まさに自治体は、そもそもそういう機能を持っているわけですが、今日は財政破綻と言われても何だかよく分からないという方もいる。「夕張って破綻したよね」、「メロンがあるよね」とか、いろいろ言いますが、正直、わが国のことだけれど、自治体の破綻というのは何だかよく分からない。そのことについて今日は何となく分かってほしい。それと何で破綻したかということも少し分かってほしい。また、それは分かったけれど、いまは何をしているのかということもちょっと説明したいと思います。夕張市というのは、皆さんたぶん、名前は聞いたことがあるけれど、どんなところにあるのかよく分からない方もいると思います。夕張は新千歳空港から1時間くらいで着きます。北海道の中では比較的地の利がいい。また、皆さん、北海道が大きいというのは知っていると思います。日本国土の22%。夕張も大きく763平方キロメートルあります。それがでかいのか小さいのかよく分からないと思う方もいるかもしれませんが、東京23区がすっぽり入って、だいぶおつりがきますというくらい広い。

人口は、いま9,100人。「えっ、人口9,000人で市」と思う人もいるでしょう。北海道に人口が一番小さい市があります。同じ旧産炭地で歌志内市というところが、いま人口が3,600人くらいで市ですが、夕張は人口が9,000人ということです。よく、「市であり続ける理由」というようなことを言われますが、逆に市でなくなるメリットがない。大きなメリットがあれば、もしかしたら夕張は市ではなくてもいいと考えるかもしれませんが。

さて、その広い夕張市はいわゆる炭鉱町だった。1960年には人口が12万弱でしたが、そこから55年足らずで一気に12分の1にまで減少しています。炭鉱の鉱口ごとに集落形成がなされていて、各集落の人口が減った。「広域分散型」の非常に非効率な状態になっています。

夕張といえば夕張メロン。私は夕張メロンが大好きですという方もいらっしゃるかもしれませんが、有名です。あと、ゆうぱり国際ファンタスティック映画祭というのがあって、25回開催をしまして、映画祭の中では老舗映画祭です。ちなみに、これはふるさと創生1億円という、竹下政権のときの事業でスタートしまして、財政破綻で1年休止して、市民の力でいま6,000万くらい、国や市にお金をもらわないでやっている事業になっています。地方創生という言葉が聞こえるようになってきましたが、同じような言葉で政策や何かがなかったかという、竹下登内閣のふるさと創生事業までさかのぼります。金塊を買ったり何かを買ったり、全国各地でいろいろなことをやりましたが、夕張の映画祭みたいに、かつてはこの事業でスタートし、いまは市民が中心となり6,000万ものお金を集めて継続しているのは珍しい事業だと思います。あとは夕張といたら、財政破綻した町ということです。

いま、私も含めて石炭というのは身近な世代ではない人がほとんどなので、「何？ 石炭って」というような話ですが、夕張は石炭を掘っていました。九州も炭鉱町があるのですが、夕張の場合は1888年に坂市太郎という人が大露頭を発見して、炭都夕張の歴史がスタートした。

九州の場合、町があって、その中に石炭産業が生まれるということで順序が違ってきます。夕張は石炭があったから町ができて、その産業が失われたので町がなくなるというような構造。町の興り方の前提が少し違います。

こちらをご覧ください。炭鉱町でしたので、炭鉱の会社で働いている方が、1960年のピーク時で1万6,000人と書いてあります。このとき人口が約11万7,000人いましたが、1万6,000人には

下請けとかは入っていないわけです。関連会社などを入れると、ほとんど石炭産業に町が支えられていた。その後、国内炭は海外の石炭に。石炭から石油へというエネルギー政策の転換の中で、炭鉱の閉山とともにどんどん人口が減っていきました。

簡単にここまでを振り返りますと、石炭を掘れという国策のもとやっていたので、古くは戦争需要で、戦争のために鉄が必要だと。鉄をつくるために高カロリーな石炭が必要だということや、経済の発展のためには石炭をどんどん掘らなければいけないということでした。しかし、働く人には危険がともなう。命を落とすようなこともあります。労働者確保が課題として、裸一つで夕張に来ていただければ、住宅もある。医療費も水道代も電気代もただですよ。メーンのところで働いていたら、当時のサラリーマンの3倍くらいの給料がもらえるということで、どんどん人が集まった。ところが、炭鉱会社が閉山とともに厳しい状況になったとき、そういった基本的なインフラは会社が持っていたことで新たな問題が発生した。

炭鉱会社はなくなっても人はある程度残るわけですが、病院は炭鉱会社のものですからそんなことは知りません、会社がつぶれたんだから病院がなくなって当然、ということにもならない。だから、夕張市が病院や住宅を引き取ったわけです。ただで引き取るわけではなくお金を渡して、従業員が首になるわけですから、その退職金などになった。

炭鉱の閉山、またその後の処理にかかったのが、だいたい584億円と言われています。その当時借金したのが330億くらい。ですから、基幹産業が失われて炭鉱が閉山したときに一回ある意味では破綻しているということがこれで分かるかと思います。

ではそのあと夕張はどうしたんだといたら、炭鉱から観光へとかじを切りました。いろいろな施設をつくっていったわけです。

「夕張はそういった過剰投資をしたから財政破

綻したんでしょ」と言われることがあります。確かにいろいろなことをやりましたが、確かにいろいろなことをやりました。でも一方で、いまもこれは残っている施設ですが、ホテルシューパロやホテルマウントレースイといった宿泊施設もつくっています。実は夕張は、新千歳空港から一番近い、この規模のスキー場ということで、いま、外国のお客さんも対前年比75%増と、非常に伸びています。

ですから、確かにやり過ぎてしまった感はあるのですが、一定程度こういうものが残っていたからこそ、夕張は破綻をしても何とか交流人口が保てている部分もある。あとから言うことは誰でもできる、そのときの判断は、なかなか難しかったと思います。

ちなみに夕張は、当時こういった過剰な観光投資をしていたときに自治大臣表彰といって、まちづくりの表彰を受けています。大臣表彰というのは最高表彰です。自治大臣が、「見てください、皆さん。この夕張の果敢な挑戦」。いまの地方創生ではありませんけれども。ちなみに、いま、夕張は地方創生でもモデルと言われている。自治大臣は「夕張のまねをしなさい。何でほかの産炭地は新しい挑戦をしていないのだ」といって表彰したのでしょうか。でもいま、自治省は総務省と名前が替わりまして、夕張を管理している。これはなんと皮肉だなと私は思います。

振り返ると、夕張市における財政破綻とはどんなことですかと聞かれたときに、皆さんが自分の知識として話すためにいま復習しますが、炭鉱産業でどんどん拡大して行って、エネルギー政策の転換があって、会社がどんどん厳しくなって産業が衰退して、そこで働いていた人がいなくなってしまった。その施設の引き取りを市がやって、労務債に充てたりしました。そこで一回、立ち止まるわけです。ここで事実上の破綻になっているわけですが、「ここで下を向いていてもしょうがない。炭鉱から観光にかじを切る」ということで、観光に積極投資をした。でも結果として、それはやり過ぎの部分もあった。

ここでまた一回立ち止まるが、不適正な会計処

理といって、赤字が見えないようにジャンプ方式と呼ばれましたが、標準財政規模の8倍というあり得ない規模で破綻。ちょっと簡単な説明ですが、夕張の財政破綻というのが見て取れるのかなと。

私はマスコミの方にもよく言うのですが、ニュースだと時間も無いのも分かるのですが、パターンとしては、廃屋に野良猫がいてニャーニャー鳴いている絵が出る。その次に、シャッター通りになっている商店街を高齢者の方が背中を丸めて歩いている後ろ姿を撮って、それでほしい3秒くらいですか。それでアナウンスが入って、「財政破綻した夕張市では」と説明する。そんな短い期間ではなかなかいま話したような歴史は紹介できないですけれども、こういう流れがあって財政破綻になっているということで、話をしてほしいと思います。

ここまでで、破綻した主な理由や流れは何となく分かったと思いますが、これ以降は、財政破綻によりどういうことがあったのかということ話をします。

人口減少ですが、さきほど言ったとおり、人口11万からいま9,000人になりましたという話をしました。それとともに進んだのが少子高齢化です。65歳以上の方の人口に占める年割合を高齢化率というのですが、夕張は48%を超えています。北海道全体で高齢化率が高いですが、北海道で一番高い状態で、市においていえば最も高い状態です。町を歩けば、ほぼ半数は65歳以上ということです。人口の構成でいうと70代の方が一番多い。これが一つあります。

少し視野を広げて、日本の将来を考えるとどうなのかということ、これも毎年恒例になりましたが、年が明けて新聞を見ると、過去最大の人口減というのがずっと出ているわけです。新年早々、明るい話題はないな、というように感じる方も多いと思いますが、6年連続前年比で27万1,058人減ということで、日本全体で人口が減っています。高齢化率は、まだ25.9%、札幌と同じくらいになっています。年少人口というのは15歳未満ですが、12%。ちなみに夕張では6%。今日は大学生の方

もいらっしゃるのかもしれませんが、ちょうどいまの大学生が60過ぎ、65くらいになるころ、45年後ですから2060年。いま、この2060年に、政府は1億人を維持すると言っていますが、人口問題研究所の試算だと8,600万人くらいになるということです。

そのときの高齢化率はどうなのかというと、65歳以上の方の割合は39.9%、これは少し古いですが、約4割です。ですから、私が70いくつですか。いまの大学生が60代後半くらいになったころ、いまの大学生が支えられるくらいの年齢層になったときに、日本の人口構造が夕張くらいになるということです。

人口問題研究所の試算ですが、夕張だけの考え方でいうと高齢化率なども前倒しになっています。だから40%は確実に超えるのではないかと思います。そう考えると、夕張のことというのは何となく他人ごとではなさそうな雰囲気が出てきたと思います。

夕張は、人口減少や少子高齢化だけでなく、返していかなければいけないお金がいっぱいあるわけです。夕張の市税収入は8億円しかありませんが、財政破綻したことによって償還しなければいけないお金が353億円ありまして、毎年平均26億円返すことになっています。ですから行政サービスをカットしてお金を返済しなければならぬ。

私が市長になって、夕張市は最近どうなのかと、いろいろな人に聞かれるので、借金時計というのをつくりました。いまいくら返しているのかをリアルタイムで発信しています。ホームページを見ていただければ、どれくらい財政再建が進んでいるのかが一目瞭然になっています。

そこで、夕張はどうなっているのかということ、だいたい1秒間に67円返しています。これ以外の借金もあるのですが、破綻という意味で抱えている353億に関しては、1秒間に67円。1秒間に67円といっても実感がないですよね。何かよく分からないなということですが、一方で国や地方を合わせて、借金が1,000兆円を超えたと言

われています。そこで置き換えるとどうなるんだというお話ですが、一人当たり730万円強、1世帯当たり1,800万円抱えている計算になるとよく言われて、「いやいや、財政は大変ですな」ということがよく言われるわけです。これは確かに大変な状況ではありますが、自治体と国というのはちょっと違います。国はお金を借りられますが、夕張市はもうお金が借りられません。そういう経営の単位が違います、これが国と地方を合わせた長期債の額になります。

試しに、これを1秒換算で置き換えている人がいますが、だいたい82万円が1秒間で増え続けるということで、夕張市は国からどんどん財政を健全化しなさいと言われていたのですが、私から言わせれば、夕張市は1秒間に67円返していますが、国は1秒間に82万円増え続けているということを見ると、夕張市民は夕張市民であり国民でありますので、そういう意味でのつらさというのが何となく分かるなど。

こういう話をすると、夕張の話というのは意外に私たちにも関係ない話ではないのではないかと気がするのではないのでしょうか。いま言った人口減少の問題、夕張は大変だ、12万弱いた人口が9,000人になってしまった、夕張は急激な人口減があって大変なところだ、という話ではありますが、日本も結構人口が減っているな、大変な問題という意味では、時間はゆっくり過ぎるけれど同じような感じになるのかな。また、それとともに少子高齢化が進みますという話をしました。45年後、夕張に近いような人口構造になる。そう考えると、夕張の課題というのも結構そういう意味でも近いのかなと。

または財政難の問題も、自治体の数は1,700ありますが、それぞれ行政サービスの格差が開いています。今後どのように行政を維持していかなければいけないのかを考えると、夕張という存在はある意味で借金をいっぱいこさえて、サービスも極限まで圧縮してやっているわけですが、どういったところに水準を置けばいいんだろうということを考える、一つの象徴的自治体に望むも望

まないもなっている。

夕張というののもう一つ特徴があります。唯一の財政再生団体といわれるのですが、借金がいっぱいあるのは分かった、サービスが圧縮されているのも分かった。でも、それ以外にどんな障害があるか、ということを知りやすくしているのがこの図です。市長というのは、夕張市民が選んでくれて市長になっている、それと同じく市議会議員も夕張市民が投票して選ばれています。普通の町だったら、そこで選ばれた市長や市議会議員がものごとを決めていって、ルールや予算の使い道などを決めていきます。

でも夕張の場合、法律に基づいてそれがちょっとイレギュラーな形になっています。破綻したことによって、財政再生計画というお金を返していくための計画をつくって、それが17年の計画ですが、その計画に載っていないことをやろうとしたとき、たとえば最近でいうと、マイナンバーという制度が始まるのを知っている方もいると思いますが、たとえば国の法律改正があって当たり前やらなければいけないことも出てきます。でも、夕張市の場合はそれも大臣の同意が要ります。ですから、夕張の市議会だけでものことが決められない。

そのときに夕張市は、「夕張はこういうことをやりたいと、北海道のほうに相談しましょう」と言って、北海道に相談します。北海道は総務省に相談します。それで、最終的に大臣が「よろしい」と言うと、初めて計画が変更できる。このような状況にあるのは夕張だけです。

このことにより、どのような弊害があるかというところ、私は市長に就任してすぐ「これは伝言ゲームだ」と言いました。伝言ゲームを知っている人いると思いますが、この会場で端から端まで順番で回っていくようにして、最初にある共通の話をして、最後の人で答え合わせをしたら全然違う答えになっていて、笑って楽しむゲーム。でも、われわれは生活を預かっているのであって、楽しくゲームをやっているわけではない。

私は国会議員でもなければ、政党をつくって過

半数を取って、法律をつくる、変えるという政治力もないものですから、法律は変えられないですが、国、道及び夕張市が夕張の地で一堂に会して、三者でものごとを解決しようというスキームをつくりました。また、現在、取り組んでいる中で、関心を持っていただいている政策の一つにコンパクトシティー化計画というものがあります。コンパクトシティーというのはどこでもやっていることですが、われわれがやったのは、今後20年で人口が半分になる。9,000人から、さらに5,000人、4,000人になる。そのときに持続可能な形はどういった形があるか。20年後の将来像を決めて意思決定をした全国初のプランです。「全国初はおかしい。人口減が日本全体で起きていて、何でそういう議論がされないのか」ということも、少し話したいと思います。

冒頭、広域分散型の都市形成で非効率であると言いました。まずは各地区を地区内集約し、最終的には南北軸へ集め、清水沢地区というところに都市拠点を置こうという計画です。「何でこれが全国初なの？人口が減っていて夕張は非効率なのだから、当たり前じゃないか」と思う人もいるかもしれませんが。これはどうしてやるのが難しいかという、市長も選挙があって人気投票。一番多く名前を書かれた人が市長になるわけです。そのことを考えたときに、清水沢地区というところを将来の都市拠点にするというのは分かったが、それ以外の地域はなくなるという絵が見えたとき、そこに住んでいる人たちはどう思うでしょうか。

清水沢地区に住んでいる人は、「20年後に向けて清水沢をどんどん活発にしていくな。都市拠点ですから。よかったよかった」、となるかもしれない。でもそれ以外に住んでいる人たちは、「いやいや、うちだって家も買っているし、そんなものを示されたらうちの評価も下がったりして困る。そんなことをやられては困る。今度の市長選挙で絶対に鈴木直道という名前は書かない」、ということになってしまう。

具体的にどういうことをやったかという、夕張というのは公営住宅の割合が日本で一番高い市

です。炭鉱町の閉山の話のときにふれましたが、炭鉱会社が持っていた住宅を5,000戸引き取りました。夕張は5,000世帯しかいません。公営住宅が3,700戸くらいありました。公営住宅というのは、皆さんご存じの方もいるかもしれませんが、自分の家を持っている人は公営住宅には原則入れません。住宅に困っている人が公営住宅に入ります。

いわゆる公営住宅法に基づく住宅は、所得が一定以下の方が対象となる。日本で一番公営住宅が多いということは、一定所得以上の方はなかなか住みにくいとか、住む住宅が少ないということもいえると思います。そういう町の構造がありました。

一方で民間の賃貸住宅は、3,700くらい公営住宅があるのに対して、民間住宅は100戸しかない。しかも入居率は90%を超えていて、家賃は札幌よりも高い。いわゆる独占企業状態になっているわけです。どれだけ高い家賃を払おうが、夕張で危機管理上いなければいけない人や、所得を超えたが夕張に住まなければいけない人たちは、当然そういうところを探るか家を建てるしかない。家を建てるリスクを考えたら、賃貸を借りよう。でも賃貸が少ないから、家賃が高くても入るという構造です。

それは町の構造としていびつだと、皆さんもたぶん聞いて思ったと思うのですが、私はそのピンチを逆にチャンスに変える方法はないだろうかと考えました。そして、さきほど説明しましたコンパクトシティーを考えたのです。たとえばこの東京の都心で同じことをやろうとしたときには、民間の持っている財産だったり賃貸だったり戸建ての家が圧倒的に多いわけです。そんな中で、コンパクトシティーといったってなかなかできない。でも、公営住宅が日本で一番割合が高いということは、行政主導で多過ぎる公営住宅を再編するプランをやりながら、縮小する町を描きやすいのではないかと。むしろマイナスが優位性になるといえると思います。そういう展開で新しいバリアフリー住宅を建設しながら、スクラップ・アンド・ビル

ドというよりも、スクラップ・スクラップ・スクラップ・スクラップ・アンド・ビルドというくらいの感じで住宅をつくりながら集約をしています。

古い住宅から古い住宅へという移転パターンもやっています。これは説明すると長いので端折りますが、12棟あった住棟を6棟に再編して移動してもらい。古いところから新しいところに移動してくれというのは比較的楽ですが、このパターンは古いところから古いところに移ってくれというパターンなので、説得に半年以上かかりましたが、100%同意で移転しています。この3年間でいたい200世帯くらいが移転しています。市長就任前4,000ちかくあった住戸もいまは3,500まで圧縮して、多かった公営住宅を除却再編して真ん中に集め、少な過ぎる民間賃貸住宅を建設促進して町中に誘導しています。公営住宅の維持管理は税金で賄いますので、民間の賃貸が増えることが望ましいのですが、民間の賃貸もいま36戸建設して、町の形を変えていっています。

もう時間もないのであまり話せませんが、もう一つくらい話したいと思います。そういうコンパクトシティという話を聞くとちょっとマイナスな感じなので、ポジティブな話はないのかという話を少ししたいと思います。夕張は100年くらい石炭を掘っていたのですが、まだ70%強の石炭が地下に眠っています。石炭があるというだけでなく、石炭層に付着している天然ガスがいっぱいある。コールベッドメタン（CBM）、すなわち炭層メタンガスというものがあります。

夕張はこのCBMを活用して、エネルギーの地産地消のモデルをつくろうと考えています。これは後付けですけど、たまたまさっき言った清水沢地区という将来の都市拠点の左右にそのガスが眠っています。その埋蔵量は、77億立方メートルというガスのボリュームがあります。1年間、全国で生産しているガスが33億ですから、1年間で国内生産するガスの倍以上の量があります。日本はエネルギーに乏しい国で、エネルギー自給率でガスを考えると5%くらいしか自給率はないと

思います。だから、夕張のガスが77億あるといっても、それを全部活用しても、日本国内の全国民が利用するガスの2カ月弱くらいしかもたないというものです。

いままで国のエネルギー政策は、原子力発電もそうですが、資源に乏しいわが国はいかに安定的に海外から安いエネルギーを調達するかというのが国策でした。私から言わせれば、世界中がガス余りになってガスの価格が安くなっているのに、原発が再稼働していないために足元を見られて高いガスを売りつけられ、過去最大の貿易赤字を超えていた時期もありました。そういう意味では政策としてどうかと思いますが、破綻した夕張にそれだけのガスがあって、さらにコンパクトシティや持続可能な町と政府が言っている中、その都市拠点の左右に天然ガスがあるのであれば、それをわが国初で活用するべしというのが私の提案で、市長就任以来ずっと言ってきました。

何とか実現したいと思っています。これはある方が言っていた話ですが、日本は世界でも類を見ない課題先進国であるということでもあります。最近、いろいろなきによく課題先進国と言いますよね。その人が言っていたのは、少子高齢化、1,000兆円を超える債務、東日本大震災、原発の廃炉問題。日本には、世界が目指す課題がたくさんあると。何とも不名誉な感じですが、そう言っていました。その課題先進国の中の課題先進地が夕張だと。こうやって言われるとばかにされているのか褒められているのかよく分かりませんが、これからどうなるか非常に注目している。

夕張は破綻をして、必要に迫られていろいろなことをやっているのですが、そこでいろいろなことを考えていく中で、どんなところに住んでいても、東京であれば区であり市町村で生活をしていって、いったいどうやってこれから先ここで暮らしていけばいいのだろうかという究極の形態がある意味では模索している自治体とも言えるのかなど。

夕張の市長というのは、財政破綻をしてから、私の前の前の市長も4年任期で体力の限界である

ということでお辞めになられて、私の前の市長も体調不良になってお辞めになりました。私が、史上初の2期目の破綻した市長です。私もあともう少しで倒れるかもしれませんが(笑)、そういったことで挑戦していますので、ぜひ皆さんもこれを機会に関心を持ってもらいたいと思います。

司会 鈴木様、大変ありがとうございます。それでは会場の皆さまからご質問等がございましたら、よろしく願いいたします。はい、お願いします。

質問者 夕張市が市であり続けることのメリット、デメリットというのをちらっと言ったんですが、もう少し突っ込んで聞きたいと思います。これはみんな聞くことで、たしか「カンブリア宮殿」でしたか、村上龍さんもそこらへんを聞いていましたが、メディアではカットされているというか、よく分からなかったの、そこをちょっと聞きたい。

そのつながりで話がつながっているのかなと思ったのは、コンパクトシティの話がありましたよね。あれはもうなくなるであろう本当に過疎的なところを、税金を使って延命させるのではなくて、強制的に清水沢地区、南北軸に集中させるという、ある種の自治体の意思決定の範囲というか、その範囲で、夕張市という単位で夕張の市長選をやっているんだから、ある種の強制力を持つというか。ちょっときつい言い方になるかもしれませんが。

鈴木さんはもちろんそういう強制力というよりは、粘り強く最後の一人まで、どこまでも説得するというか、対話するというスタンスであるというのは間違いなく、そこは本当に素晴らしいと思うんですが、たとえばそういうことなのか。夕張市であり続けることのメリットというの、そういう意思決定が強制力を持つということなのか。その確認です。

鈴木 「カンブリア宮殿」を見た方もこの中にい

るかもしれません。私の答弁は過激過ぎるというので全部カットされたのだと思います。ちゃんと答えているのですが。いまご質問のあった話は、市であり続けるというのもそうですが、要はコンパクトシティなんて無駄じゃないかと。夕張が市であり続けるのではなくて、ほかのところとくつつくとかはどうなのだと、そういう質問かと思えます。二つ理由があります。一つは、夕張市は隣町まで35キロぐらいあって、自治体の広域連携が非常にしにくいところです。たとえば市要望の広域化や事務処理の部分での広域化も取り残されてしまっています。陸の孤島みたいに残ってしまっている中で、さらに財政破綻ということで、それを引き取ってまで一緒に効率化を図ろうというところがない。逆に言えば、夕張は単独でどこまで行政を回せるかを、立地上も求められている地域だというのがまずあります。

もう一つは、もう夕張なんかなくなっちゃえばいいじゃないかと。夕張なんかもう、なくしてしまえばいいという方もいます。その部分については、それは確かにそこに住む人たちの自由を保障するということや、憲法議論や関係法律にも関係してくるでしょう。それら課題を乗り越え実現するには、たとえば大阪都構想というのがありましたが、一定の人口規模になったらその町は廃止をして、こっちにくつついてもらう。そのために、憲法で保障されている権利も含め、その根拠法も全部変える。それを掲げて選挙に打って出て、国民の過半数を得て国会議員を送り出して、法律を変えて。憲法はなかなかハードルが高いので、そこをどう解釈するかというのはありますが、そこまでやって実現するということは、政治的エネルギーを持ってやるというより、なかなか理解が得られない部分なのではないか。強制移転というのはできません。

そういう意味では、関係法律を全部変える手続きを、政治的パワーを持って実現するのか。それともいまの権利も受け継ぎながら、現実的に、心情的なものも納得をさせながらもダウンサイジングをさせていって、適正規模化をしていくのかと

いうことを考えれば、私は前者はできないので、少なくとも後者でやろうと。そのときには、確かに回りくどい話ですが、丁寧な説明をしていかなければいけない。

あと、夕張のプランは2段階になっている。地区内を集約して、そのあとに真ん中に行こうということですから、地区内を集約したあとに真ん中に行くのではなくていきなり真ん中に行けばいいんじゃないかという方もいるのですが、それは現実的な対応を知らない方がおっしゃっている話で、地区内で集約するという成功体験があってこそ、次の都市拠点への移動の理解が得られる。

人間というのは、成功体験を自分の目で視覚的にも見て、体験的にも得られて協力するわけです。それに不安を抱えながら独裁的な方が声高に叫んだとしても、それが実現しないのであれば、そういう小さな成功体験を積み重ねていった中でそれを実現する。それには大変なエネルギーが要ります。これはどこもやっていないことですので、成功するかどうか分かりませんが、少なくともいまの法体系やルールの中でやるとしたら、これが一番近道じゃないかと思ってやっているところです。

司会 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

質問者 市の幹部の人たちがだいぶ退職されたわけですよね。調整とか、そういった仕事、これはいままでの仕組み、やり方ではできなくなるわけです。それをどんなふうにされたのでしょうか。

鈴木 恥ずかしい話ですが、本当に走りながらこの4年間やってきました。幹部職員が全員いなくなって、平が一気に最高職に上がっているわけです。そんな組織の中で誕生した市長であり、まさに平から市長になっている市長です。副市長は、うちはお金がないので置いていない。仕事をするみんなも先輩がいなくなって不安。私は公選職ではありますが、そういう形で市長になった。9割

がみんな年上という状態の中で、経験的にもみんなが上の中で政策方針を決定していかなければいけなかったのも、みんな爆弾が破裂する寸前で私の部屋に駆け込んできて、「どうしましょうか」と。普通はそれをどうしようかと考えてから相談するのですが、どうしましょう、どうしましょうというのが連日連夜続いているような期間もあった。

私はある意味で、立場が人をつくるではないですが、いままで平で管理職経験がなかった管理職たちもその立場になって、破綻した町の管理職というものもなかなか経験できることではないと思うのですが、本当に幅広い分野をやらなければいけなくなった。

民間の企業も含めてかなり知識面でのサポートをいただきながら、破綻してから8年間たっているのですが、その中でかなりスキルアップをしてきたと思う。あと5年くらいはまだいいですが、一斉退職して平を一気にあげたわけなので、またその人たちが一斉退職する。要は、一斉退職の後遺症みたいな状態になってしまっていて、そこが悩ましいなど。そういう組織の形を考える上でも多くの疑問を投げかける体制だったと思うのですが、その体制をどうやって生き返らせていくか、いま、試行錯誤しているところです。

司会 ありがとうございます。それではお時間となりました。鈴木様、どうもありがとうございました。(拍手)

では、続いてセクション2といたしまして、NPO法人夢のデザイン塾理事長、田中直子様よりご講演を頂戴いたしたいと思います。田中様、どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

講演

田中直子 (NPO 法人 夢のデザイン塾 理事長)

ご紹介いただきました、田中直子でございます。長野県松本市から、今朝参りました。ただいまの夕張市長さんのお話を、大変感銘を受けながら聞かせていただきました。私はとてもあんなふう

魅力的に堂々と語る自信はございませんが、私なりに「人を支援するというのはどういうこと？」と自問してきたことを精いっぱいお話ししたいと存じます。どうぞよろしく願いいたします。

まず、自己紹介をさせていただきます。二足のわらじとありますが、私は四足も五足も履いておりまして、簡単に自分の仕事を紹介することについても難しさを感じておりましたので、表をつくってまいりました。「ある1週間」というのは今週のことでございます。

月曜日は松本市の労政課に行って、市民向けの心の相談室のカウンセリングをしていました。今週の火曜日は、午前中は松本市の教育委員会でキャリア教育推進協議会というのに出ています。ここの参加メンバーは、小中高の校長先生、松本市の商店会の専務さん、それから市PTA連合の副会長、高校生のお母さんでもいらっしゃるという方等々で、みんなで松本市の子どもたちの未来につながるキャリア教育のありようについて、けんけんがくがくと、もう10年以上論議を重ねている場でございます。

午後は個人オフィス兼自宅で、民間企業向けの公開セミナーを頼まれていまして、そのテキストづくりをしていたはずなんですが、嫌になって美容院に行ったりして（笑）。個人事業主で管理されないの、それが一番難しいですね。約束があると何があっても来るのですが、自己管理が甘いという、ずるずるの日でした（笑）。

水曜日は企業向けの日で、昼間は長野県で比較的大きな会社であるM社の心の相談室の運営を頼まれていまして、従業員とその家族のカウンセリングをホテルでしてました。来談の秘密を守るためにその会社ではやらず、駅前のホテルでしてました。夜は中小企業、60人規模の食品会社で、昼間は皆さん現場が忙しいので夜に集まってもらって、仕事の見える化、業務の標準化と共有というプロジェクトのコンサルティングをしておりました。

木曜日は、県内の私立高校のキャリアカウンセラーとして出ていまして、高校生、時々はその保

護者や先生からのご相談もありますが、そんな相談に乗ってました。たまたまきのは卒業生から2人、卒業したあとの適応についてのご相談がありました。今日はここでございまして、あしたは、90歳の母が千葉に住んでいまして、そこで掃除。物が捨てられない年代なので、掃除をしたり、母の住んでいるシニアマンションが文化祭をやっている母もかな書道を出したから見てほしいというので、写真を撮ってあげようと思っております。夜は、NPOの仲間たちが首都圏にも会員がいてくださるので、その方と、感謝を込めて会食をしようと思っております。

あさっての日曜日は移動日です。夕張の市長さんは1時間で帰れると言っていましたが、私は特急あずさで3時間かかりまして、バスを乗り継ぐと半日仕事なので、半日かけて自宅に帰って、連れ合いとの少ない共通の趣味が日帰り温泉とお蕎麦です。それを味わって、夜は自分の趣味の洋裁をしようと思っております。

洋裁もここ3年くらい一念発起して始めたもので、それまでは雑巾も縫えないような体たらくでした。人間いくつになっても育つと思っているんですが、いまでは主人と息子のワイシャツも縫えるようになりました。ちなみに今日のワンピースも自分でつくったんです。無理やり拍手を強要しているようになったらすみません（笑）。申し訳ありません、もう結構でございます（笑）。そういう趣味をやっております。

次は、わらじが増えてきた変遷を時系列でたどるとどんなかということ。個人史をこの機会に整理してみようと思いましたが、ちょっとお付き合いいただけますでしょうか。正直に言いますと今年で還暦です。私は立教大学の日本文学を専攻しましたが、学部を出たあと都内のメーカーに就職しました。女子学生に大変厳しい時代でしたので、苦勞してメーカーの役員秘書から社員教育のセクションになりまして、社内への研修をしていました。28歳で先輩と一緒に独立し、株式会社を起こしまして、特に大手、上場企業を中心とした会社からのオーダーに合わせた社員教育の研修

講師をしていました。

それからだんだん経験を積むごとにコンサルティング。当時はTQC活動でデミング賞を取ることが経営管理のブームになっていて、あちこちから依頼を受けて一緒にコンサルティングをしたり、均等法の前夜でしたので、女性の戦力化、活用についてのコンサルティングというオーダーもずいぶん舞い込んできました。本当に駆け出しで未熟だったのですが、休みがない、365日駆けずり回るようなありがたい仕事をしておりました。

そんな中で転機となったのは、横線を引っ張ったところですが、結婚をしまして、連れ合いが長野の大学の教員だったものですから、私も長野に転居して住み始めました。出会ったのは信州大学というところで、民間から客員講師として登壇というような試みの中に混じらせてもらいまして、そこでキャリア教育のはしりだと思えるのですが、現代経営論等々のお話をする機会を得まして、それが長野に移り住むきっかけにもなりました。

それからは地方で暮らす者として、そしてご支援の対象も大企業から中小企業に対象が変わってきたことと、縁あって行政との関わりもできるようになりました。最初が職業安定行政、職業安定審議会の審議委員をやらせてもらったことで、それまで民間の仕事や人しか主に理解していませんでしたが、公的な仕事の日線や役人の方たちのご苦労という事柄が分かるようになりました。

90年代に入りましたら円高の影響でリストラ旋風が吹き荒れまして、私がいままでご縁があった会社の方たちがそういうつらい目に遭っていることを耳にしました。いままでは、どちらかという企業に対する援助をしてきたスタンスだったのですが、働く人、働きたい人個人に対するサポートができないだろうかと思ひまして、カウンセリングの勉強をして、シニア産業カウンセラー、キャリアコンサルタント等の資格を取って、労働者とその家族へのカウンセリングをしてまいりました。そして2003年、そんな経験からNPOを運営します。

ちなみに法政大学とのご縁は、2007年、50歳になる前後だったでしょうか。いままでの現場の経験を客観的に整理したいという思いで入学して、勉強させていただきました。それで現在に至るということでございます。

労働行政で関わった中で、非常に私の中で学べたこと、印象に残ったことを一つだけご紹介しますと、職務経歴書の大切さを実感しました。ここに挙げた冊子は、ハローワーク小諸の当時の所長だった新津利通さんという人に頼まれて、利用者向けにつくった冊子です。私に頼んでくれた意図がとても心に残りました。新津所長がおっしゃるには、「すごく有名な大学を出たりすごく立派な肩書きやすごい資格があれば、履歴書だけでたぶん通用するだろうと。それどころかそれさえなくても、ヘッドハンティングみたいな形でどんどん売れていくだろう。でも、ハローワークに来る人たちはそうでない人がほとんどだ。そういう人たちが、自分がいままでやってきた事柄の中身を、肩書きや資格ではなく、中身に自信を持って仕事探しに出ていけるようになるためには職務経歴書が必要なんだと思うよ」と。そのように熱く語ってくれました。それで、私は何日間かハローワーク小諸に詰めました。

松本から小諸は1時間半近くあるんですが通いまして、どんな方がいらっしゃるのかわいたり、待合コーナーに座って隣の人と世間話をしたり、女子トイレでガールズトークをしたりということで、その目線みたいなことを実感して、誰もが分かりやすく書けるものということでこれをつくったんです。それが長野労働局、全部で13カ所のハローワークがあるんですが、全域で採択されて利用され、その後厚生労働省で採択されて、五百数十カ所の全国のハローワークで無償提供されるようになりました。そういう意味では、いまでは職務経歴書が重要だと当たり前になりますが、実は長野発なんですということをご紹介したいと存じました。

そんな流れの中で、NPO法人をつくろうということで、2002年に志を同じくする3人で発起

人会合みたいなものを持ちました。1人は先ほど紹介した新津利通さん。もう故人なので、身内に敬称を付けて申し訳ないのですが、とても呼び捨てにはしたくない大事な人なので「さん」と言わせていただきますが、新津さんはハローワークの窓口外でも困っている方のサポートをしたい、そういう場が欲しいと語りました。そして松井秀夫という者は、こっちはまだ生きてるので呼び捨てで申し訳ないですが、人材紹介業をやっています、企業から値が付かないというのでしょうか、売れない人を取りこぼしているのが切ないので、そういう方たちの力になりたいという思いでNPOをやりたいと言いました。

私自身は、企業向けのコンサルティングやセミナーをやってきて、個人向けのカウンセリング等、個人的な援助をしてきて、その両方の橋渡しがしたいという思いがありました。それがリンクして、2003年4月に長野県初の職業能力開発、雇用機会の拡充の支援に取り組むNPOとして認証されました。

その設立趣旨を読みます。「地域社会に暮らすさまざまな人々、特に若者・女性・中小企業に働く人々に対して、環境変化に対応した職業選択と適応の実現をサポートすることによって、地域社会に貢献することを目指す」というものです。つまり、組織に頼れない、頼りづらい方たちをサポートしたいという思いでございます。

発足当時、長野県初ということで注目度がありまして、こちらの右側、信濃毎日新聞が設立総会の際の模様を紹介してくれました。左側（読売新聞）はキャリアガイダンスをしているところです。12年前です。

現在、13年目になります。いま現在は何をやっているかと申しますと、ずっと継続していることですが、今年度やっていることは、長野労働局から委託を受けた就職支援セミナー。長野県内の13ハローワークにて、年間468回のセミナーを回しています。これは大事でして、1回でも誰かが風邪を引いたとか何とかだと迷惑をかけてしまいますので、本当にひやひや、1日終わるたび

にひやひやするというような感じで運営しています。

それから四つ目の四角ですが、長野県中小企業団体同友会から委託を受けて、県内で100回の個別就職相談をしています。下から2番目は地元進学情報誌「マナビュー6号」を発行する計画です。長野県内の全高等学校に無料配布しており、2万部発行しています。これは、高校生記者が地元の専門学校や大学の学生にインタビューをして紹介するというコンセプトで、学生の啓発的体験、高校生は体験ということと、結果として知り得た情報を同じ時代に生きる高校生に情報提供しようという狙いがございます。

右上にあるのが「マナビュー」という情報誌でして、過去に5号出ています。左の「VIEW」というのは職業紹介編で、たとえば憧れのアナウンサーに会いに行こう、SBCのアナウンサーに会いに行こうとか、女性の杜氏に会いたい、パティシエに会いたいなど、そういう会いたい人のところへ会いに行って、職業を理解するというものも4号やりました。

下のほうは、「先生のためのキャリア・カウンセリング事例集」。これは高校の先生たちに向けて、キャリア・カウンセリングのスキルや会話の展開の仕方等、実際の事例をまとめてご紹介したものです。それが下段左から2番目の「先生のためのキャリア・カウンセリング事例集」ということで、学事出版から出版されました。こんな形で、私どもの内部で積み重ねたささやかなナレッジをマネジメントしながら、同時に地域の先生等、保護者等に役立ってもらいたいという思いでの出版活動をしております。

ここまで、私の自己紹介、仕事史とNPOの仕事についてご紹介してまいりました。後半はといっても、もう残り6分になってまいりまして、ここからがメインだったのですが、具体的な支援事例をご紹介したいと存じます。ただ、紹介することも大変悩みまして、誰かを傷つけたりすることにならないとか、手柄話みたいにならないかしらという惑いがあるって考えたのですが、五つの

条件の中から事例紹介として選びました、四つほど事例をレジユメにも用意してありますが、当たり前のこととしての守秘義務、それから数多い典型的な相談で何人かをシャッフルして、物語に仕立てて話そう。ただし、断片的なエピソードはリアルなもの、事実に基づいたものを提供しよう。そして、対象者は老若男女に接していますが、10代の若者とその親御さんの例からご紹介したい。そして一番は、自分の中で気づきがあったこと。こんなふうに背中を押せば、相談者の方がご自分で一歩前に出ようと思えるものなんだと、自分の中で胸に落ちた、印象に残った事例をご紹介したいと存じます。

事例1、さおりさん。通信制高校の3年生が3年の春になって相談に来てくれました。中学時代はいじめ等の原因で完全な不登校でした。地元の誰にも顔を合わせたくないということで、片道2時間かけて通学している女生徒でした。やりたいことが見つからない。そして学力に自信がない。3年間の欠学がありますので、本当かどうか分かりませんが、アルファベットもろくに書けないというんですね。それから、人間関係にも自信がないどころか、怖いと。こんな私に行ける大学はあるのだろうかということでのご相談でした。

私がどんなサポートをしたかといいますと、成績も調査書も何も持たずに、その方の興味のあるようを頼りにしてキャリア・カウンセリングを進めますので、たまたま材料になったものとして、その高校に来ている提携校からのパンフレットを何個かを一緒に見ていきました。デザイン系の京都の大学のパンフレットのあるページをめくったら、「わあ、この絵、好き」と言ったんです。「この絵を描いた先生のところで勉強したい」と言ってくれて、「わあ、いいね」とうれしくなったんですが、すぐにそのあとにピューンと落ちまして、「でも、この先生が怖い人だったらどうしよう。叱られたら、あたし行けなくなっちゃう。前もそうだった」と言って、また落ちちゃったんです。

「じゃあ、会ってみようよ。何とか会えるように手紙を書いてみようよ、その大学の入試課に」

と言いました。ああ、手紙なら書けるかもしれないとその気になったのですが、また、「私なんか迷惑じゃないかしら」というふうに上がったりが下がりたりしたんですね。でも結果として書いて、入試係も大変に優しく接してくれたそうで、先生とも会えて、いまは大学に入れることになりました。

お母さんからあとで聞いた話ですが、お母さんが、「実は、私もあの子が手紙を書いて出すとか言ってびっくりした。あんな引込み思案な子がと思ったんだけど、私もついつい、『ええっ、迷惑じゃないの？ あんた、厚かましくない？』って言っちゃったんですよ。でも娘が、『いい。迷惑どころか、入試係の人が喜ぶかもしれないって。先生も喜ぶかもしれないって、キャリアカウンセラーが言ってたよ』と言うので、一生懸命に書いて、本当に自分で働きかけて自分で進んでいった。その様子を見て、自分自身が人目を気にして生きてきて、つい子どもに迷惑かけたらいけない、みたいなことばかり言っていたことを反省します。いま娘は、まぶしいと思います」と言ってくださって、とてもうれしい、いい経験でした。

あと三つあるんですが、あとは一言ずつ、こんなサポートをしましたということだけ申し上げます。留年して死にたい、学校へ行けない、死にたいと言ってほやいているお子さんに対して、「甘えたことを言っているんじゃない」と言っているお母さんに対して、危機介入をしました。死にたいと言うくらい追い詰められているとすれば、高校なんかいくつもあるんだから、いま行っている高校が嫌だったら、そこを必ず出なくてもほかへ行けばいいじゃないのということを、お母さんにサジェスチョンしました。知り合いのほかの高校の先生にすぐに電話をしてアテンドした結果、それまで完全に引きこもってご飯もろくに食べなかった子が、お母さんの車を洗ったりして外に出るようになり、そして二つ三つ高校見学に行きだしているという事例でございます。

これは、一度始めたことは守らなければいけないという強い価値観をお母さんもお父さんも持つ

ていたし、お姑さん夫婦も持っていて、そういう圧力の中で、「死にたい」と言っている子に対して、切ないという母の思いはありながらも、そっちのほうで動けなかった自分をお母さんはすぐに気が付いて、子どもの味方となって動いたという例でございます。

性同一性障害の方への援助としては、質問を意識してやりました。自分自身が未分化なセクシャリティーに対して、具体的な質問をすることで、自分自身の取扱説明書ができた事例です。たとえば「お風呂は男と女とどっちに入りたいの?」「トイレはどこがいいの?」「寝る場所は男の部屋?

女の部屋?」「恋愛対象は誰?」というような事柄を、仲よくなる経緯があった上で質問することで、自分自身が質問されて答えたことをメモして帰りまして、それを基に取扱説明書をつくり、それで大学に進んでいったという例がございます。

そして最後、まきちゃんというのは選択的緘黙でまったくしゃべらない子だったんですが、どういうわけだかキャリアカウンセリングルームには来て3年間過ごしました。就職希望でした。経済力がないので大学には行けないから就職したいということで、就職を希望したんですが、本人がしゃべらないので、これは面接や通常の就職活動は無理だと思って、とてもおせっかいをやきました。自分の顧問先の企業の総務部長に頼み込んで面接までやってもらい、代わりに私が自己PRをしました。

この子は、一度も時間を破ったことがないんです、約束の時間に必ず来ます。それから、この子から人の悪口を聞いたことが一度もありませんと言ったんです。しゃべらないから褒めたこともないですが、事実ですよ。そうしたら、それはいい子だって。この子は聞きながら涙ぐんでいて、その純情さにほれ込んで採用が決まったというケースもございます。そのおせっかいをしたことによって、引きこもりになるか、社会人として税金を払って社会保険を払って、免許を取って車を買って自立していくという、その天と地ほどの差。

社会のお荷物になるか、社会を支える若者になるかという違いがあつてよかったなと。おせっかいても時には必要なんだと感じております。

私自身が人に向き合うときに心に置いている言葉をいくつか挙げましたが、現在、すごく意識しているのはバランスです。つまり、カウンセラーの分度、外部のコンサルタントという分度をちゃんと守り、組織のルールもちゃんと守ることも大事ですが、自分の中に湧き立つ何とかしてやりたいという情も大事で、どっちかということではなく、時に応じてバランスを保つことが大事なんだとすごく感じています。

最後に「俠気(おとこぎ)」と書いてあるのが、何か格好付けているような言葉で迷ったんですが、NPOの大事な女性の仲間が、こういう言葉を私に言ってくれました。とても困っているときに相談したら、「直子さん、今日はその俠気、しまっときな」と言ったんです。おもしろいことを言うなと思ったんですが、その人自身がいろいろな人をサポートしながら、いろいろなあつれきに遭ったり砂をかむような思いをしているんだということも薄々知っていましたので、消耗しない持続可能な支援をするためには俠気も必要だけれど、俠気の出し入れ、しまうことも大事だよということを言ってくれたんだと思っています。

それ以来、私は、朝に資料を入れるときに、「その俠気、持っていく? 持っていかない?」と自問しながらやっています。そうすると、何か肩の力が抜けて、消耗感がずいぶん減ったような気がしております。時間が過ぎてしまいましたが、以上で私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

司会 田中様、大変ありがとうございました。次はセクション3でございしますが、会場の準備がございしますので数分間お待ちください。

ディスカッション

齊藤潤一（東海テレビ報道部 部長）

田中夢実（東海テレビ報道部 記者）

司会 ここで登壇者の変更のお知らせがございます。事前のご案内では、東海テレビ報道部編集長の奥村様にお越しいただく予定になっておりましたが、奥村様はお仕事の都合上、どうしても今日はおいでになれないということで、代わりにその上司に当たられます、報道部長の齊藤潤一様にお越しいただくことができました。続くセクションでは、齊藤様と、もうお一方、報道部記者で、本学部ご出身でいらっしゃいます田中夢実様のディスカッションを頂戴したいと思います。

それでは齊藤様、田中様、どうぞよろしくお願いいたします。

齊藤 皆さま、こんにちは。名古屋の東海テレビ放送報道部長の齊藤と申します。よろしくお願いいたします。

先ほどご案内させていただきましたが、本来でしたら、法政大学社会学部を1995年に卒業した当社の編集長の奥村が、今日ここでお話をさせていただき予定だったのですが、最近東海地方でいろいろな事件が発生しておりまして、編集長という仕事はニュースを統括していますので、彼がいないと今日のニュースが回らないということで、欠席をしていただいて、代わりに一番暇な私が参加したということでございます（笑）。

隣にいますのは、2014年に同じく法政大学キャリアデザイン学部を卒業した田中夢実記者です。彼女は入社2年目で、もともと東海テレビに入った時は事業部で事業の仕事をしたということだったので、春に研修に来たときに、すごくいい人材だなと。彼女は「血を見るのが嫌いだから、絶対に報道の仕事はしたくない」と言ったのですが、人事にお願いして報道に来てもらって、1年とちょっとが過ぎたところです。

奥村のプロフィールに、「自称100年に1人の逸材」と彼は書いていますが、彼女は200年に1

人の逸材だと思いますので、今日は二人で話をしたいと思います。よろしくお願いいたします。（拍手）

田中 東海テレビ放送の田中夢実と申します。よろしくお願いいたします。

まず、今回のテーマが、人のキャリアとか役に立つ仕事ということで、すごく考えたのですが、いまちょうどやっていることが人の役に立つというのは自分であまり考えられなくて。ただ、7月に私が取材をして放送したものが、自分の中ではすごく印象に残っているので、まずはそのVTRを見てほしいと思います。ちなみに名古屋で活動する性的少数者のアイドルグループの取材をしたものです。では、お願いします。

〔VTR 上映〕

齊藤 ありがとうございます。これは、特集としては初めてつくったのかな？ 長いものは。

田中 初めてではないです。

齊藤 何回目かね。入社1年目くらいだよ、7月だから。2年目で、報道配属が丸1年だね。

田中 はい。

齊藤 丸1年でこのようなVTRをつくれるというのは大したものなので、さすが法政大学出身だなと思うんですが。今日は私が彼女に質問して、いろいろな話を皆さんにお聞きいただく形にしたいと思います。まずこれをつくってみてどうでしたか。

田中 一言で言うとても難しかったです。これを放送することによって、私はもう家族と縁を切らないといけなかもしれないとか、職場を追放されるかもしれないって、そこまで危機に迫っているっていうのが、一番人を傷つけないな

という思いと、取材をしなきゃいけないという思いとがすごくゴチャゴチャになりながらやりました。

斉藤 この取材は何が難しいかと言いますと、主人公の人が顔を出しているんですね。パートナーの人はモザイクがあって声も変えているんですが、なかなかこういった人を取材するというのは難しく、ベテラン記者でも人間関係をキッチリつくってからでないといけないものです。

LGBTの方って結構タレントさんでもいますが、そんなタレントさんではなくて素人の方がテレビの画面でこういうふうに出るといのは、皆さんもなかなか見たことがないと思います。たぶんいろいろな苦労があったと思うんですが、どんな苦労があったんだっけ。

田中 2度程、これは放送ができないんじゃないかという危機がありました。

斉藤 それはどんな危機だったのかな。

田中 まず、1回目は撮影をしたらいけないと言われたことがありました。冒頭とか後ろでも使っていたんですが、アイドル活動をしている映像はすごくモザイクが多くて、いったいどこでやっているんだろうとか、全然分からなかったと思います。それを放送するには理由がありまして、もともとあのイベントはLGBTの方々向けに行われていたすごくクローズなイベントで、そこでLGBTの人たち同士が友達をつくってほしいという思いの下のイベントだったので、たとえばメンバーの人はその分いっぱい出るしということで撮りたかったんですが、来ている人の顔は撮ってはいけない、会場がどこか分からないようにする、場所も出さない、客の顔も撮らないという条件で、私はもちろん事前に取材のお願いは電話でもしましたし、前日には実行委員会の委員長さんにもお会いしてあいさつもして、ここからこういう角度で撮りたいので、どうか明日はよろしくお願

います、いいですよというふうには言われていました。

ただ、なぜ駄目だったかと言いますと、そのときにこのイベントの司会をやっていた方が、「私はテレビを撮影するのは聞いていない」というふうに。「だから、こうやってテレビの撮影をするんだったら、この司会者を降りる」とまで言われて、そこでまず1回撮影が駄目になりました。

斉藤 実行委員会の人はオーケーだったが、司会者の人が嫌だと。

田中 はい。

斉藤 ということは、実行委員会の人が司会者に伝えていなかったっていう。

田中 そうです。そこもきちんと話はいってなかったみたいです。

斉藤 それは実行委員会の人がオーケーだから、田中記者は大丈夫だろうと思ったのね。

田中 そうです。いままで普通の取材だと、実行委員会がオーケーだと、駄目ってなる取材はそうそう経験をしたことがなかったので、そう思いました。

斉藤 それでどうしたんですか。

田中 でも、私たちも撮って帰らないといけないという思いがあったので、会場にも呼びかけて、一回イベントを終わられたあとに、もう一回、撮影と、NSM = のライブをみんなでしようと言って、終わってすぐにもう一回、こういうふうに撮影するので撮りますよという下で、もう一回撮影をさせていただきました。

斉藤 そうすると、その時点でだいたい出演者とか、出ている人は減ったの？

田中 1人は減りました。

斉藤 でも、結局1人だけで。

田中 そうです。

斉藤 司会者の人はどうなったんですか。

田中 もう出なかったです。

斉藤 もう出なくて、というので撮影をさせてもらったと。

田中 はい。

斉藤 もう一回終わったあとに仕切り直しをしたというのは、自分で考えてそういうふうに行ったんですか。

田中 話し合いの下だったんですが、どうしても迷惑をかけたくないという思いと、どうしても撮って帰らなければいけないという思いで、どこが折衷案なのか、本当にお互いに探り探りで決めました。

斉藤 これが一つ目の苦勞。

田中 はい。危機でした。

斉藤 もう一つ苦勞があるんだよね。

田中 はい。もう一回は、今度は撮影したけれど放送しないで、という連絡がきました。これは、私たちが撮影してから少したって編集作業をしているときなんですが、特に連絡上のトラブルとかも全部解決して、さっきの問題も解決したあとでした。

斉藤 それで、こちら側はもう全てオーケーだと思ったと。

田中 はい。

斉藤 編集作業もして完成が近づいたときに、やっぱり放送しないでくださいと言われたと。

田中 そうです。というのも、あまり詳しくは言えないんですが、キー局の「****」という中で、LGBTの人たちは本当に幸せなの？ というような特集をやっていて、みんなそういう特集だからメンバーが見ていたんですが、その中で、語弊があるといけないんですが、おじさまみたいな方が女性のかつらをかぶってイベントを楽しみに来ていたという。そこで芸人さんが、「いや、こんな人、もうただのおっさんじゃん」みたいな発言をしました。

その一言で、それを見ていたメンバーが、テレビってこうやって自分たちのことをおもしろおかしく言われてしまうんだな、みたいなことを思っていて、このジュリアンさん、そして彼女のミウさん、あとメンバー全員が、「もうテレビという媒体が怖くなったからやめてほしい」というお話でした。

斉藤 それはすごくよく気持ちは分かるんですが、取材したほうとしては、放送日も決まっていて、これがもし放送できないとなると、その日の放送に穴が空いてしまうという大変深刻な事態だったと思うんですが、それはどうやって乗り越えて放送に至ったんですか。

田中 本当に何回も何回も話し合いもしましたし、いまでもLINEとかでジュリアンさんとは連絡を取っているんですが、私は決して傷つけるような放送はしたくないですという思いをまず伝えました。これはテクニックとかという問題ではなかったと思います。本当に毎夜毎夜電話して、おっしゃることもすごく分かるし、絶対傷つけるようなことはしたくないけれど、やっぱり私たちも、取材の途中で私たちを伝えてくださいという思いと怖いという思いがジュリアンさんたちにもあったので、そこの伝えたいという思いもなるべく引

き出すように話はしました。

斉藤 ちょっと話が戻るんですが、もともと何でこの取材をしたい、しようと思ったの？

田中 ちょっと、したいというのとはずれてしまふかもしれないんですが、自分自身、意外と軽くいったんですよね。こういうネタがあると教えてもらって、そんな私、あんまり性的少数者に対する差別感もないし、できるだろうという、本当に軽い気持ちでいったのが最初です。

斉藤 われわれ報道に関わる人間としては、社会的使命とかあって、今日のタイトルも「ひとの人生や生活をサポートするしごと」とあるんですが、こういう企画をやるとき、LGBTの人を多くの人に知ってもらいたい、そういう苦しみを知ってほしいとスタートする場合もあると思うんですが、きっかけとして、入り口としてはそうではなかったということ。

田中 そうですね。

斉藤 それで、取材は何回くらいやったのかな。

田中 ロケ自体、おうちと喫茶店と練習風景と、あとは本番ですが、それにプラスαで、3日間くらいは練習に1人で小さいカメラを持って行きました。

斉藤 最初から、テレビに出ることについてはすぐにいいよと言ってくれたの？

田中 最初はすごいいいよ、でしたね。やっぱり伝えたいという思いが彼女たちにもあったので。

斉藤 そのときは、これはスムーズに全て取材が進むだろうと思った。

田中 はい。もちろんモザイクとかの指定が難

しい。何でモザイクかというのと、さっき言ったように家族と縁を切られるかもとか、仕事場で見つかり辞めさせられるかもとか、そういうことがあったので、そこだけはきちんとしたらどうかなと最初は思っていました。

斉藤 さっきの二つ目のトラブル。もうテレビで放送しないでくださいというので、電話で一生懸命に口説いたというか説明をして、最終的には分かりましたと言ってくれた。

田中 そうですね。でも最終的には、私たちも放送する前のものを見せることは絶対にできないので、思いだけです。人間として、信じる、信じないの問題だと思います。あとは、この方たちがすごく、LGBTの人は困っているんだよ、困っているんだよということではなくて、自分自身がすごく幸せに暮らしているんだということを伝えてほしいと。こういう、ただ本当に人として幸せに暮らせるんだよという、そこを見てほしいという思いもあったので、そこは自分が取材してそういう価値観が変わったから、そういうところはやっぱり伝えたいですという思いを話しました。

斉藤 そうすると、最終的には渋々というか、完全に納得はしてくれないけれど、という感じで「放送してください」という感じかな。

田中 そうですね。お願いしますという感じですよ。

斉藤 それで、放送後、反響みたいなのはどうでしたか。

田中 放送後は、Twitterとかにもすごくいろいろな意見が載っていて、「こんな見たくない」と書いている人もいれば、「応援したい」と書いている人もいます。これが、ジュリアンさんが書いてくれたTwitterの中身ですが、本当に何度も何度も言い合って、これに本当に凝縮されて

いるかなと思います。

LGBTというのが、ただこういうふう楽しく暮らしている人がいて、それを私がもし伝えるきっかけになったのだったら、それは自分としてすごくうれしい仕事をしたなというふうには思いました。

斉藤 これはTwitterですか。

田中 Twitterの抜粋です。

斉藤 そのあと、本人とお話はしましたか。

田中 もちろんしました。

斉藤 本人はどんな感想でしたか。

田中 泣いて電話をくれました。

斉藤 それはどうして？

田中 前のテレビの影響もあって怖かったというがあるので、テレビと言ってもやっぱり信頼をされていない部分もあったみたいで、本当にこうやって幸せな形を少しでも伝えるきっかけになって、この方もいろいろな声をもらってみたいで、それで、「本当にうれしいです」という感じで、泣いて電話をいただきました。

斉藤 それでさっきのお話もありましたが、最初取材するときは、何となくこの取材をしたということだったんですが、実際に取材を通して、最初から最後まで1カ月か2カ月くらいあったのかな、初めて会ってから。

田中 そうです、はい。

斉藤 それを通して放送してみて、その後自分の考えが変わったというのは何かありますか。

田中 実はこういう問題はよく報道もされていますし、たぶん回りで見ている方もいらっしゃると思うので。でも、私は全然差別していないよとか、そんな違和感を持っていないよという人、何か私みたいなタイプって意外と多いんじゃないかなと思うんですが、本当に単純に人と人が楽しくこうやって暮らすあり方もあるんだよって。そこはもう、男女とか性別とか年齢とか関係ない、人と人との信頼感というのが一番大事で、そのあり方というのはいろいろあるんだなという。そこが、実は、かけていないようで色眼鏡をかけてそういう人たちを見ていたんだなっていうことが自分で分かりました。

斉藤 それで、今日のこのテーマ、「ひとの人生や生活をサポートするしごと」ですが、この仕事はそういう仕事になったというふうには、自分で仕事を終わって思いますか。

田中 正直、サポートにはなっていないかもしれませんが。これを見てさらに嫌になった人もいるかもしれないですし、全てがいいとは思わないからですが、でもきっかけの一つには。今日も見てくださったからだと思いますし、こういう人たちがいる、こうやって幸せそうに暮らしているって少しでも頭にインプットされていたら、それで私はいいかなと思っています。

斉藤 いつもこういうふうには、放送したあとに反省会というのがあるんですね。そこで報道部長として、つくった人に感想を一応言うんです。そのときこんなことは言っていなかったと思うんですが、上司としてはすごく誇りに思う企画だと思います。「ひとの人生や生活をサポートするしごと」になっていたんじゃないかと思っています。

われわれマスコミって、非常に悪いところなんですけど、ものごとを片方から見がちなんです。ここでも出てきた二つ目のトラブルで、「もう放送しないでほしい」と言われたのは、某キー局が放送したLGBT特集の中で、おじさんがかつら

をかぶったような人が出てきて、出ていた芸人が「ただのおっさんじゃん」という発言をした。茶化したということですね。

結構いま、LGBTのタレントさんがいっぱいいます、その人たちは一生懸命に仕事をしているんですが、回りの人は茶化すというような見方が多いんですね。実際、本当にLGBTの人たちって、何を考えて、どうしてこういうふうになったかという視点で放送することは、あんまりこれまでなかったと思います。

それを彼女は、マスコミの悪い一方的な視点ではなくて、逆の立場から、この人たちは本当は何をを考えているんだろうというところを、今回の企画は見事に放送して、視聴者の人たちにもLGBTの実際というところ、テレビに出ているタレントさんもいつも明るく生き生きとしているんですが、実際はそうじゃないんだよというところを、彼女はこの放送を通して多くの人に伝えることができたのではないかなと思います。

さっきも言いましたが、日夜われわれが気をつけているのは、どうしても一方的な形からの報道が多いんですね。たとえば昨日から今日のニュースで、旭化成建材のデータ偽造問題がありました。昨日の夜に会見をしたからというのがありますが、昨日の夜から今日の朝刊で何を書いているかというところ、この担当者や会社を悪者にして、この会社や担当者が関わった工事は何件ありましたというような、そういうニュースがほとんどなんです。でも別の角度から見ると、もちろん悪いことをしたと思うんですが、この悪いことをした人にも理由があると思うんですね。これはこれから出てくるかもしれませんが、下請けに当たるわけなので、工期を早くしろとか、もしかしたら工事の代金を値切られているとか、いろいろな事情があると思います。弱肉強食の世の中がこうさせているのかもしれないと思います。

そういう視点の報道は非常に大切だと思います。たとえば別の話でいうと、殺人事件が起こりますと、とにかく犯人が悪い、被害者がかわいそうだという視点の報道が多いんですが、なぜ犯人

はそんなことをしたんだと。もしかしたら、それは社会的に貧困だったかもしれないですし、家族的に弱かったかもしれない。家族に恵まれていなかったかもしれない。社会的に弱かったかもしれないという、そういう視点がわれわれは欠けているんですね。

世の中からそういう事件をなくすためにはそういう報道を心がけないといけないと思うんですが、今回の田中記者がつくったのは、多角的な視点でものごとを見たということで、私上司としては二重丸を付けたいような企画になったんです。

もう時間もないので、最後に、報道2年目ですが、われわれマスコミが果たす役割。これはまったく打ち合わせにないので頭が真っ白になっているかもしれませんが、マスコミの役割って何だと思いますか。

田中 役割。うーん。まずは、起こったことを伝えること。それに対して、何でそれが起こったのかっていうのを。

私が一番取材のときに気をつけているのは、やっぱり人を傷つけないとか人の心を考えるということなので、たぶん殺人事件も旭化成の話でも何でもそうだと思うんですが、何か人の心にたどり着けるように報道がしたいなという。役割ではないかもしれませんが、それが目標ですね。

斉藤 私は、マスコミ、われわれ報道の役割というのは二つあると思っています。日夜そういうふうに思って仕事をしてきたんですが、一つは権力の監視ですよ。それからもう一つは、社会的弱者の方に手助けをするような仕事。この二つがわれわれマスコミの大きな役割だと思っておりまして、そういう意味ではこの企画は、権力の監視という部分はそれほどでもないですが、社会的弱者のことを少しでも手助けするような企画にはなっていたのではないかと思います。

私は、唯一今日法政大学の出身者ではないですが、東海テレビには法政大学の出身者がいっぱいおりまして、報道にもいっぱいいます。前任の報

道局長、取締役ですが、この人も法政大学出身で、すごく法政大学の学生はバイタリティーがあって、明るくて元気で、私も採用試験をやるんですが、すごく大好きな大学です。

今朝、人事部長と話をしています、今日は法政大学に行くと言ったら、おそらく会場全て学生さんだろうから、しっかりとリクルートしてきてほしいと言われました。学生さんは3分の1くらいですかね。東海テレビも一生懸命に頑張っているニュースをつくっていますし、ニュース以外のところも、制作番組、イベント、いろいろやっています。ぜひ東海テレビに就職をしていただいて、田中夢実記者のような優秀な記者と働いていただけたらうれしいと思います。

では、最後に一言。

田中 本当にこの大学の名前に恥じないように、ちゃんと人の心を持った記者になれるよう頑張ります。

斉藤 それでは、これでディスカッションを終了させていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

司会 斉藤様、田中様、大変ありがとうございました。

皆さま、本日は大変ありがとうございました。最後に、本日を統括するコメントを、本学部学部長金山より述べさせていただきます。(拍手)

総括

金山喜昭(法政大学キャリアデザイン学部 学部長)

長時間、今日の講演、それからディスカッションをしていただいて、大変ありがとうございました。私から総括ということですが、感想を最後に少し述べさせていただきますと思います。

このシンポジウムの冒頭に、佐藤さんのほうから命題が二つあったらと思うんです。一つは人のキャリアというのはどういうふうに築かれる

のかということ。もう一つは、人の人生や支援するというのはどういうことなのかという、二つ命題があったと。そういうことを意識しながら、私なりにいろいろ発表、ディスカッションを聞かせていただきました。

まず、人のキャリアというのはどう築かれるのかということは、鈴木市長がおっしゃっていたなかに、大事なキーワードがあったと思います。財政再建団体になった自治体のほとんどの管理職が辞めていく。その結果、それまで平の若い人たちが、その肩代わりをしていく中で、立場が人をつくっていくんだという発言がありました。

そのことがとても大事な言葉であって、鈴木市長のキャリアもまさにそうなんです。夕張市というのはああいう非常に厳しい状況の中、東京都の職員を辞められて市長選に出る。職員を辞めて、これで落選してしまえば、ただの人になってしまう、無職になってしまうわけですが、そういうリスクを冒してまで挑戦されて、その中に入って、人口減少や少子高齢化、また借金の償還と、次々と難題に取り組んでいく。そのような経験についてのお話を聞きましたので、何よりも鈴木市長そのものも、キャリアをまさに経験の中で築かれているんだなと思いました。

また、それに続いて、NPO法人の夢のデザイン塾の田中さんからもお話をいただきましたが、田中さんはタイトルにもございましたが、人の支援をすることを問い続けてこられた。まさにそのことがご自分のキャリアを築いてきたというお話を聞かせていただきました。ディスカッションの中では、本学部の卒業生の田中さんが果敢に挑戦をされている、報道、セクシャルマイノリティーのそういう特集の報道のビデオを見せていただき、それをふまえて、上司の斉藤さんが引き出し役になり、田中さんから貴重な体験談を聞かせていただきました。

田中さんがおっしゃっていた中で、印象的であったのは、私は人の役に立つことをあまり考えたことがないとおっしゃった。ああ、そうなんだなと思いました。でも、卒業して間もない若者が

仕事に取り組んでいくというのは、たぶんそんなものだろうと思います。われわれは、とかく学部教育の中では、人の支援を声高に言ったりすることがあるのですが、若者はきちんとその辺りを自己消化しながら、社会に出たらそんなことは言っていられない。まずは仕事に挑戦していく。そうした意味がそのような形で出たのではないかと思います。そのようにして最初の命題にあった、人のキャリアというのはどう築かれていくのかということ、いろいろと触発されるものがありました。

それから二つ目の命題ですが、人の人生や生活を支援していくというのはどういうことなのかということです。それについて、冒頭の鈴木市長のお話、住民が最盛期には12万人いたけれども、いまは9,000人くらいになっている。住民は財政再建団体になっていても、いろいろとわがままも出るだろうと思うのですが、市長は住民に丁寧な説明をすることを繰り返しているというお話をしていました。

講演前に控室でお話を聞いたときにも、夜も昼も朝もなく、住民が「市長さん、話を聞きたい」と言えば、5人でも4人でも、車座になって一緒に話し合う。市長の家の玄関はいつもピンポンピンポンと呼び鈴が鳴って住民が訪ねてくる。そんな話をされていました。根気よく丁寧に住民に説明しているそうです。だからこそ、ああいう形で夕張市が再生に向けてきちんと、1秒間に60円くらい返金しているという話もありましたし、国はそれと真逆な状態も示されていましたが、そういうことなんでしょうと思いました。

それからNPOの田中さんのお話の中では、相談者の方とよく話し合われているということだったと思います。話をよく聞き、そういう中で背中を押せば自分で一歩進めるようになるんだということを感じさせたというお話がありました。そこでもきちんと相談者に向かい合い仕事をされていると思います。

最後に東海テレビの田中さんからお話があったのは、放送ができなくなりそうな危機が2度ほど

あったということですが、セクシャルマイノリティの方たちの顔を出すことがないというのは私もそう思いましたし、それがああいう形で放映されたというのは本当に素晴らしいことだと思います。でも、やはり危機があった。それを乗り越えるために、やはり何度も相手と話し合いをされたということです。嫌だと言うが、電話をしたり直接会ったり話し合いをして、相手に分かってもらう。その結果、映像に出た本人から、Twitterで「見ている人に伝えられたら私はうれしい」というコメントがあったということなんです。

人の生活や支援、人生や生活を支援することに取り組んでいくということは、声高にやるわけではないが、いまのお話のなかに織り込まれていると思います。それを三つにまとめてみると、一つは何度もちゃんと話し合いを繰り返していくことが大事なんだと思います。二つ目は、粘り強く根気を持って、ちゃんと対応していく。三つ目は、丁寧に相手に接していくということだろうと思うんです。

その結果として、相手に対する支援になったのかどうか、はっきり分からないし、それは田中さんがおっしゃったように、きっかけになったのかもしれませんが、「そうなればうれしい」ということなんでしょうと思います。これも田中さんがおっしゃったように、人の心にたどり着けるようになればよいという意味で、キャリアに対する支援するということを今回の事例を通して勉強させていただきました。

これが総括になったかどうか分かりませんが、皆さん方はそれぞれいろいろな感想をおもちになったことだろうと思います。ぜひ今日のシンポジウムを一つの契機にして、「人の人生や生活をサポートする」ということについてお考えいただければと思います。主催者として、そのような機会になれば幸いです。

最後に、本日ご登壇をいただいた皆さん、本当にどうもありがとうございました。(拍手)